

ネワールの法界マンダラの伝統とサンスクリット・テキスト

著者	立川 武蔵
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	007
ページ	231-233
発行年	1989-03-04
URL	http://doi.org/10.15021/00003720

ネワールの法界マンダラの伝統と

サンスクリット・テキスト

立 川 武 蔵

本書に収められた法界マンダラの各尊の白描はアバヤーカラグプタ(11世紀)の『完成せるヨーガの環』に従って描かれたものであることはすでに述べた。ところでこのサンスクリットのテキストに見られる記述は簡潔なものであり、各尊の特徴を詳細に述べてはいない。それはこのテキストがインドの図像に関する約束事のある程度知っている者を対象にして書かれているからである。テキストに述べられていないことの中でも画家が当然従わねばならぬとされていることと画家の自由に任されていることがある。もっともどこまでが規定されており、どこまでが自由であるのかについては明白な基準はなく、時代や地域によっても異なる。わずかに残された儀軌等のテキストと図像によってわれわれはインド・ネパールの仏教図像の伝統を明らかにして行かなければならないのであるが、その作業はまだ始まったばかりである。

本書に収められた白描はガウタマ・ラトナ・ヴァジュラーチャーリヤが描いたものを基礎にして氏との協議のすえ完成したものである。『完成せるヨーガの環』のテキストの読みやテキストの意味の不明なところもあった。また、テキストには明記されていても氏が受け継いだネワールの伝統とは異なるという場合もあった。以下はこれらの個所についての覚え書きである。

No. 1 テキストには「二重蓮華の花卉に獅子が乗り、その上の二重蓮華の上にマンジュゴージャ(文殊)がいる」<1・2>とある。しかし、白描 (No. 1) では二重蓮華(あらゆる方向に花卉を有する蓮華のことであり、図像としては上下に花卉を有する蓮華として表現される)は獅子の下にない。白描を描いたガウタマ・ラトナ・ヴァジュラーチャーリヤ氏によれば、これはこの法界マンダラにおける「他の諸尊の蓮華——二重蓮華ではない——と合わせるためである」とのことであった。なお、獅子の上の二重蓮華が描かれていないのは、同氏によれば「獅子等の乗物に乗る尊像の場合、自分が教えられた伝統では乗物に直接乗るのであって、乗物の上に蓮華がありその上に尊像が居るといのは描いたことがない」とのことであった。

「乗物の上に蓮華があり、その上に尊像がみられる」というテキストの記述は、No. 1 の外、No. 10, No. 15, No. 20 および No. 25 のテキスト<1・3・5>に見られるが、白描は No. 1 におけると同様、二重蓮華はない。

- No. 34 テキストには「金剛鉤 (*vajrāṅkuśa*) を持つ」とあるが、ここでは鉤に金剛がついていない。金剛鉤がどのように表現されるかは不明である。
- No. 42 テキストには「睡蓮を持つ」とあるが、この白描では、睡蓮と蓮華との図像学的区別は明確ではない。No. 58, No. 61 等を参照。
- No. 43 緑宝 (*marakatamaṇi* エメラルド) の伝統的な描き方については不明である。
- No. 46 「誇らしげに (*sagarvam*)」とテキストにあるが、図像学的にこれをどのように表現するかは不明である。No. 62~85 等にも「左手には誇らしげに各自の持ち物を持つ」と述べられている。
- No. 66 「ジャーティ」とは、ガウタマ・ラトナ・ヴァジュラーチャーリヤ氏によれば、*nutmeg (jātilatā)* のことである。
- No. 68 「プリアング」とは、同氏によれば、*long pepper* のことである。
- No. 72 多くの写本には *vajraratnamañjarī* とあるが、ここでは *ratnamañjarī* として表されている。
- No. 84 ガウタマ・ラトナ・ヴァジュラーチャーリヤ氏は、*ratnakaranda* の *karanda* を剣の意味にとっている。
- No. 120 テキストには、「手に花の器を持つ」とあるのみで、「花の器を蓮華の上に乗せる」とは書かれていない。しかし、この白描では、蓮華の上に花の器を乗せている。同様のケースが、No. 121~124, No. 126~No. 127 にも見られる。この程度の相違は、画家の自由に任された範囲であると考えられる。
- No. 121~124 No. 120 の註参照。
- No. 126~127 No. 120 の註参照。
- No. 144 「インドラニーはインドラと同様である」とテキストにあり、インドラ (No. 128) は「右手に金剛杵を持ち、左手で明妃の乳房に触る」と述べられている。インドラの妃インドラニーは、しかし、インドラの乳に触るわけではない。この白描ではネワールの伝統に従って、インドラニーは頭蓋骨を持っている。

- No. 151 テキストには「七頭立ての馬車の上に日天がいる」とあるが、この白描では馬車は描かれていない。ネワールの一般的伝統では馬車は描かれな
いとのことである。
- No. 161 テキストには「コーキラ鳥の引く車の上に……いる」とあるが、日天
(No. 151) の場合と同様に、ネワールの一般的伝統では馬車は描かれな
いとのことである。
- No. 162 テキストには「おうむの引く車に……いる」とあるが、日天 (No. 151)
およびジャヤカラ (No. 161) の場合と同様に、ネワールの一般的伝統で
は馬車は描かれな
いとのことである。